

<書評>

『世界の言語政策 — 多言語社会と日本 —』

横島 貴史

現在の多文化主義により多様な人種・民族で国が構成された結果、経済のみならず情報や文化などの領域でグローバル化が進展し、各言語共同体が持つ文化や地域性、また生活上で言語に関する様々な問題を抱えるようになった。

国家の地理的・政治的・経済的視点からの国家安定・維持において言語は密接に関係し、多言語社会において、単に言語の多様性を尊重するだけではなく、それらの言語の背景にある思想、価値観、世界観、アイデンティティの問題等への政策を打ち出すことにより、良好な国家運営へ結びつけるべきである。しかし、多くの人々は言語を社会的有用性という視点から捉えがちで平等の視点に立った異文化理解の促進が重要な課題となっている。「世界言語」である英語が優勢な言語となり、他の言語が英語の下に位置し、世界各国で各国公用語、

マイノリティ言語、少数民族言語が外部である英語への抵抗力を失いつつある。しかし内部においても現実にマイノリティ言語、少数民族言語が内部においてのマジョリティ言語への抵抗力を失いつつあることも確かである。

ある国では土着語を国家の象徴、社会のアイデンティティを担う言語とするため、言語政策で積極的に自国語を中心に政策をとり、旧宗主国の文化やイデオロギーからの独立、または伝統的な社会構造や価値観を保存しようと動き出している。一方で言語状況が地理的、歴史的にも複雑で、社会言語学的に言語に優越が存在し、何十年間にもわたり社会に浸透した旧宗主国の言語の実用性が重視されたり、土着語は経済的・技術的停滞の原因とされ、世界で経済発展している国の言語を獲得することが貧困と低開発の打破に繋がるという発想で現実には、政治・行政・高等教育・マスメディアなどの公的場面では依然として外国語が支配的である国もある。また、一国の多言語状態は国家としては問題であり、摩擦の原因、国を分断するものとされたが、あえて多くの言語を公用語に定めている国もある。他にも、歴史性の欠如ゆえに軽視されてきたピジン・クレオール語や、移民と移

民の子供たちの言語教育の問題など、多言語・多文化の共生の理想を目指すうえで現実的に解決不可能とされる課題が多く蓄積されている。

その中でこの本は、グローバル時代に生きる我々が、現在の各国の多言語社会の現状と動向・言語政策・言語問題を知り、自身が生活している環境での多文化社会における言語政策・言語問題について考える多くの示唆を与えてくれる。

多文化が尊重される時代に、各民族の言語が尊重されずに消えていく。これは民族自体を消滅させるほどの大きな問題である。今後、おとずれのかもしれない自身の生活する場でのさまざまな言語問題や言語教育問題、マイノリティ言語の問題を真剣に考えなければならない。

多文化社会、多言語社会は政治的・経済的に良い面ばかりが強調されるが、そこから生じる様々な問題のほうが多いのかもしれない。本に書かれているアメリカ・モンゴル・フィリピン・オーストラリア・ニュージーランド・カナダ・イギリス・南アフリカなどのそれらの問題や課題をめぐる論争を知ることから、まず私たちは始めてみてはどうだろうか。

著者 岡戸浩子、川原俊昭、後藤田遊子、中尾正史、長谷川瑞穂、藤田剛正、松原良次、三好重仁、山本忠行（五十音順）

出版社 くろしお出版（2002年9月）

（よこしま たかし

東海大学日本語文学系 碩士班）